

韓国語の二種類の否定形式の併存に関する機能類型論的考察： 文法化の観点から

守屋哲治* 姜 奉植** 堀江薫***

*金沢大学教育学部 **岩手県立大学総合政策学部

***東北大学大学院国際文化研究科

moriya33@kenroku.kanazawa-u.ac.jp bs-kang@iwate-pu.ac.jp khorie@intcul.tohoku.ac.jp

1. はじめに

韓国語には文否定の副詞に、*ci anh-ta* (long form)と*an-ta* (short form)の二種類の形式が併存しており、ほぼ同様に用いられるが、容認性に差が出る場合がある。差が生じるのはlong formが可能でshort formが不可能である場合がほとんどである。本研究では、この差は、二種類の否定が辿って来た文法化(grammaticalization)の経路の差から生じていると主張する。特に、Givón(1995)で論じられている文法化の程度と選択制限の度合いとの関係の考え方を援用して論証を進める。さらに、二種類の否定形式が併存することがJespersen(1917)の否定の循環的発達の考え方や、Hawkins(1986), Horie(1998), Horie and Kang(2000), 堀江 (2001), Moriya and Horie (2002)などで論じられている意味的類型論(semantic typology)の考え方に対して重要な証拠を提供することを示す。

2. 韓国語の二種類の否定

韓国語には、文否定の形式として*ci anh-ta* (以下long form)と*an-ta* (以下short form)の二種類の形式が併存している。ほとんどの場合、どちらの形を用いることも可能であるが、一方のみが容認可能な場合がある。以下、Sohn (1999)およびKim(2000)に基づいて主な違いを挙げる。

a)動詞は概して両方の否定形式が可能であるが、形容詞の場合はlong formのほうが自然であり、この傾向は特に多音節語の場合に強くなる(Sohn 1999: 391, Kim 2000:29):

- (1) a. *alumtap-ci anh-ta*
beautiful-COMP NEG-DECL
b. ??*an alumtap-ta*
NEG beautiful-DECL
'be not beautiful'

b)補部が名詞の場合、long formは連結詞を否定できない(Sohn 1999: 391):

- (2) a. *hakusayng-i an i-ta*
student-COP NEG be-DECL
b. ??*haksayng i-ci anh-ta*
student COP-COMP NEG-DECL
'be not a student'

ただし、補部が漢語系の接尾辞-cekで終わる場合にはlong formによる連結詞の否定が許容される(Sohn 1999: 391):

- (3) a. *hyokuwa-cek i an i-ta*
effective COP NEG be-DECL
b. *hyokuwa-cek i-ci anh-ta*
effective COP-COMP NEG-DECL
'be not effective'

c)複合動詞ではlong formが好まれるが、分離可能な場合にはshort formが可能になる(Sohn 1999: 391):

- (4) a. *kongpu-ha-ci anh-nun-ta*
study-do-COMP NEG-PRES-DECL
b. **an kongpu-ha-n-ta*
NEG study-do-PRES-DECL
c. *kongpu (lul) an ha-n-ta*
study OBJ NEG do-PRES-DECL
'do not study'

ただし、複合形容詞はこのような分離は不可能である(Sohn 1999: 391):

- (5) **hayngpok an ha-ta*
happy NEG do-DECL
'be not happy'

d)能力の否定を表すmosが形容詞を否定する場合はlong formでのみ可能。ただし、その場合は元々の意味が薄れて強調詞のように振る舞う(Sohn 1999: 391):

- (6) a. *coh-ci mos ha-ta*
good-COMP NEG do-DECL
'be not good'

b. kil-ci mos ha-ta
long-COMP NEG do-DECL
'be not long'

e) 否定命令に用いられる malta は long form の否定としてのみ生起可能 (Sohn 1999:391):

(7) o-ci ma (la)
come-COMP NEG (IMP)
'Don't come.'

f) 否定の意味を内在している動詞とその肯定対応形は long form でのみ否定可能 (Kim 2000:30):

(8) a. *an al-ass-ta
NEG know-PAST-DECL
b. *an moll-ass-ta
NEG not.know-PAST-DECL
c. molu-ci anh-ta
not.know-COMP NEG-DECL
'do not know'

g) 頻度や数量を表す語との作用域の多義性に関しては、Sohn(1999)では頻度副詞との相互作用を取り上げて、long form の否定のみが多義性を生じると述べているのに対し、Kim(2000)では主語や目的語の数量詞との相互作用を取り上げて、long form と short form のいずれも主語、目的語の数量詞と作用域に関して多義性を生ずるとしており、若干観察にずれがみられる。(9)に Sohn(1999:392)の例のみ紹介する:

(9) a. ton-i pantusi hayngpok-ul
money-SUBJ surely happiness-OBJ
an cwu-n-ta.
NEG give-PRES-DECL
'Money surely does not give happiness.'
b. ton-i pantusi hayngpok-ul
money-SUBJ surely happiness-OBJ
cwu-ci anh-nun-ta.
give-COMP NEG-PRES-DECL
'Money surely does not give happiness.'
or
'Money does not necessarily give happiness.'

以上概観してきた、二つの否定形式間の相違点の大きな特徴は、short form に対する制約が強いことであり、b)を除けばいずれも short form に対する制約である。

また、文体的には long form が文章語的であり、short form が口語的であるという差もある。

このような韓国語の文否定形式の併存状況は、類型論的に見てどのような位置づけが

できるのだろうか。また、この二種類の否定のうち、short form に対する制約が多く、long form には比較的制約が少ないということはどのようなことを意味するのであろうか。

これらの問題を Jespersen(1917)の否定の循環的発達の観点と、文法化の観点から検討することにする。

3. Jespersen's Cycleと韓国語の否定形式

Jespersen(1917)は、印欧語族の言語の否定発達に関して、循環的な発達プロセスを仮定している。それによれば、否定辞は最初に文頭に表れ、否定の意図をはっきり示すが、時と共に発音が弱化していき、否定の意図を明示する他の語を補強として必要とする。そして、元の否定辞が消滅して補強として働いていた語が独立した否定辞として機能するようになる。この否定辞がまた弱化していき、同じプロセスが循環的に起こっていくというものである。英語の例を以下に示す(例文は Horn(1989:455)より):

(10) a. Ic ne secge.
I NEG say
b. Ic ne seye not
I NEG say NEG
c. I say not

(10a)は古英語の例で、否定辞 ne が動詞の前に来ているが、(10b)の中英語では動詞の後ろの位置に否定を補強する not が登場している。さらに初期近代英語(10c)では動詞の前位置の否定辞が消滅し、中英語では補強の役割を果たしていた否定辞が独立した否定辞として機能している。他のゲルマン語もほぼ同様な発達をしているが、英語の場合はさらに I do not say のように助動詞の助けを借りて本動詞の前に否定が出てきており、助動詞との縮約によって弱化が起こっている。

Jespersen(1917)ではこのようなプロセスを主として印欧諸語の否定の発達に関してあてはまるものとして仮定しているが、Horn(1989)では、否定を補強する語の性質が、日本語やバスク語などでも印欧諸語と同じであることを指摘しており、このプロセス自体が他の語族にも当てはまる可能性がある。

韓国語の否定形式も、循環的に発達してきたとすると、long form から弱化を経て short form が生じた可能性と、short form から補強が起こって long form が生じた可能性の両方が考えられる。

現在、韓国語の歴史的な発達を体系的にたどれるのは、文字が体系化された15世紀以降であるが、この時点ではすでにこの二種類の

否定形式が併存していたことが確認されている。従って、現存する資料からはlong formとshort formのいずれが先に存在したのかは決定することはできない。

そこで次に、文法化の原理を踏まえると、二種類の否定の併存状況についてどのような推測が可能になるかを述べる。

4. 文法化と韓国語の否定形式の併存

文法化とは語彙的機能を担う語が文法的機能を担うようになる変化、あるいは、文法的機能を担っている語が、より文法的な機能を担うようになる変化である²。

否定は、語彙的側面と機能語的側面を併せ持つとも考えられるが、文否定に関しては、機能語的側面が強く、文否定の発達は文法化の一種と位置づけることが可能である。

それでは、韓国語の否定形式のように同じような機能を果たすものが併存する状況というのは文法化の観点からどのように捉えられるのだろうか。それを示しているのがHopper(1991)の、多層性(layering)の原理である：

- (11) Layering: Within a broad functional domain, new layers are continually emerging. As this happens, the older layers are not necessarily discarded, but may remain to coexist with and interact with the newer layers. (p.22)

この原理は、同じ機能を表す既存の形式に新たな形式が加わっても、既存の形式と新たな形式が役割分担をしながら併存することがある、というものである。この典型的な例として、英語の未来を表す助動詞のwillとbe going toの併存状況を挙げることができる。

韓国語の二種類の否定形式に関しても、2節でみたような分布の違い、また文章語的か口語的かの違いといった役割分担がある程度できあがっているといえる。

それでは、long formとshort formのどちらがより古い形式であるかに関して、文法化の原理はどのような推測を可能にするのだろうか。

この手がかりはGivón(1995)で述べられている文法化の程度と、選択制限との関連についての記述から得ることができる。Givón(1995: 293-4)によれば、述語の文法化の度合いが進めばそれだけ元の語の意味が漂白化されるので、主語に対する選択制限がなくなるとしている：

- (11)a. I want to eat the apple.

- b. *The apple wants to be eaten.
c. I will eat the apple.
d. The apple will be eaten. (p.293)

willは元々wantの意味を持った本動詞であり、そのころは(11b)同様、無生物主語を持つ(11d)のような形は不可能であった。しかし、本動詞から助動詞へと文法化するに伴い意味が漂白化し、主語に対する選択制限もなくなることによって無生物主語が可能になったのである。

このような例から、文法化の初期の段階では、残存する語彙的な意味の影響から選択制限が多く、文法化の程度が進むにつれて、使用可能な範囲が広がっていくということが見て取れる。

この観点からすると、韓国語の二種類の否定に関しては、制約が多いshort formが相対的に新しく、long formが相対的に古いということが推測される。言語の革新がまず口語から発生し、安定した状態になってから書き言葉に取り入れられるという一般的な傾向と考えあわせれば、short formが口語的であり、long formが文章語的であるということとも矛盾しないことになる。また、韓国語では、機能語を接尾辞的に用いるのが普通であるのに対して、接頭辞的に機能するshort formの否定辞は、韓国語の文法全体の中でも新しい傾向を表しているとも考えられる。

5. 意味類型論と韓国語・日本語の否定体系

意味類型論とは、Hawkins (1986)が英独語の対照に基づいて提唱した、言語の形式と意味の対応関係に関する類型論の一般化であり、具体的には、言語の中には、英語のように単一の形式に多様な意味を対応させる傾向の強いもの(例、英語の主語名詞句は「動作主」のみならず「手段」「場所」といった多様な意味枠割を担える)と、ドイツ語のように、形式と意味対応関係を一対一により近づける傾向の強いものがある(例、ドイツ語の主語名詞句は「動作主」に限られる傾向が強い)と主張している。

韓国語の否定辞が役割分担をしながら併存している状況に関して、意味的類型論の立場からどのようなことが言えるだろうか。

Horie(1998), Horie and Kang(2000), 堀江(2001), Moriya and Horie(2002)では、Hawkins(1986)が英語とドイツ語を比較した手法を、韓国語と日本語に応用しており、韓国語は日本語よりも、より機能と形式の対応を細分化する傾向があると主張している。例えば、日本語の時間関係副詞は「まだ」と「もう」の二種類であるが、韓国語の場合、「も

う」に対応する副詞が、肯定文における *pelsse/imi* と否定文における *icey/teisang/tenun* とに細分化している。

否定文に関しても、韓国語が二種類の否定形式が併存しているのに対して、日本語では「ない」による否定だけであり、この傾向を反映していると考えることができる。

6. まとめ

本論文では、韓国語に二種類の文否定形式が併存していることに着目し、この現象が、否定の発達、文法化、意味類型論の観点からどのような意味合いを持つのかを考察した。

今後は、これらの観点から二種類の文否定の併存に関するより詳細な研究が課題となる。特に、日本語で、二種類の否定形式を併存させている方言の状況と、韓国語を比較することで、否定併存の意味合いがより明確になるのではないかと考える。

謝辞

本研究は、平成13年度日本学術振興会科学研究費補助金、基盤研究(C)「否定現象の文法化に関する研究：認知言語学および言語類型論の立場から」(課題番号 13610654)による補助を受けて行われています。

注

1. 本論文で用いる記号の意味は以下の通りである。
COMP: complementizer, COP: copula, DECL: declarative, IMP: imperative, NEG: negation, PAST: past, PRES: present
2. 文法化は、言語類型論や認知言語学の観点から近年特に注目を集めている現象である。詳しくは Heine et al.(1991), Bybee et al.(1994), Hopper and Traugott(1993)などを参照のこと。

参考文献

- Bybee, Joan, Revere D. Perkins and William Pagliuca. 1994. *The Evolution of Grammar: Tense, Aspect, and Modality in the Languages of the World*. Chicago: University of Chicago Press.
- Givón, Talmy. 1995. *Functionalism and Grammar*. Amsterdam: John Benjamins.
- Hawkins, John A. 1986. *A Comparative Typology of English and German: Unifying the Contrasts*. Berlin: Croom Helm.
- Heine, Bernd et al. 1991. *Grammaticalization: A Conceptual Framework*. Chicago: University of Chicago Press.

Hopper, Paul J. 1991. "On Some Principles of Grammaticalization." in Traugott and Heine (1991), 17-35.

Hopper, Paul J. and Elizabeth Closs Traugott. 1993. *Grammaticalization*. Cambridge: Cambridge University Press.

Horn, Laurence. 1989. *A Natural History of Negation*. Chicago: University of Chicago Press.

Horie, Kaoru. 1998. "Functional Duality of Casemarking Particles in Japanese and Its Implications for Grammaticalization: A Contrastive Study with Korean," *Japanese/Korean Linguistics* 8, ed. by David J. Silva, 147-59. Stanford: CSLI.

Horie, Kaoru, and Bongshik Kang 2000. "Action/State Continuum and Nominative-Genitive Conversion in Japanese and Korean." *Modern Approaches to Transitivity*, ed. by Ritsuko Kikusawa and Kan Sasaki, 93-114. Tokyo: Kuroshio Publishers.

堀江 薫. 2001. 「膠着語における文法化の特徴に関する認知言語学的考察：日本語と韓国語を対象に」山梨正明他(編)『認知言語学論考』東京：ひつじ書房, 185-227.

Jespersen, Otto. 1917. *Negation in English and Other Languages*. Copenhagen: A.F. Høst.

Kim, Jong-Bok. 2000. *The Grammar of Negation: A Constrained Based Approach*. Stanford: CSLI.

Moriya, Tetsuharu and Kaoru Horie. 2002. "Grammaticalization and Semantic Typology: Time-relationship Adverbs in Japanese, Korean, English and German." *Language, Information, and Computation: Proceedings of the 16th Pacific Asia Conference*, 348-57. Seoul: The Korean Society for Language and Information.

Sohn, Ho-min. 1999. *The Korean Language*. Cambridge: Cambridge University Press.

Traugott, Elizabeth Closs, and Bernd Heine. (eds.) 1991. *Approaches to Grammaticalization*. Vol. 1. Amsterdam: John Benjamins.